

文久六百題

新

0-108

新

俳諧資料カード

年代

編者  
(筆者)

書名

文久六百題

備考

下

硯評八

(下垣内蔵)

文久六百歌

秋之神

七月 七月也 青雲高き 空のしづかき

七月 七月也 風切あはれ 成別 色

七月 七月也 舟の波の 舞臺のしづ

七月 七月也 秋の風よ 家老のしづ

文月 八月也 萩の庭下 秋のそよよき

文月 八月也 中津の 萩のそよよき

文月 八月也 萩の町 萩のそよよき

只居るも 萩の町 萩のそよよき



萩

素心

定法

中凡

柏葉

秋庭

異化

接ふまゝに秋の心をもつて又月を

五 秋

三秋やきやうよ去の秋の心

秋 五

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

と秋の

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

乃晴

信長

名臣

是外

歌翁

信長

乃晴

公成

乃晴

乃晴

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

秋の心やあはれも秋の心

乃晴

乃晴

乃晴

乃晴

乃晴

乃晴

乃晴

乃晴

乃晴

乃晴

初秋

初秋の風はくもあぢきを水原の風  
吸うよ初秋の風はくもあぢきを  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風

一風  
山出  
秋風  
美子子  
根下  
佳節  
障岳  
家光  
由若

秋

秋風

秋風

秋の風はくもあぢきを水原の風  
吸うよ初秋の風はくもあぢきを  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風  
初秋の風はくもあぢきを水原の風

為晴  
波路  
赤心  
水蓋  
相左  
抱香  
可火  
交情  
自也  
系取  
在

草木はくちのちのちや秋の比  
 秋の世を引くはあるはりの人  
 秋風や何とあるはるねりか  
 空よりある人あつ門や秋の是  
 始り世や少ねの中は出さつ松  
 秋風よりさす時をきあふのま  
 あはれはよつよの竹を秋のう心  
 折るは神よまらりりあはりの是  
 秋風や舟の信よふくまはめ  
 けき風や舟よあはれ松の信  
 秋の是はつりり清しし信は

蓮く  
 め抄  
 鳥の女  
 尾村  
 士分  
 名松  
 之誠  
 能為  
 系望  
 水囊  
 子乙士

秋の是の風を針つらつちきう丸  
 向き風よりあはれきり信の面  
 吹くまはく身よまはれ秋の是  
 七ツ夕 柳まはれまはれまはれ信は物  
 七ツ夕 柳まはれまはれまはれ信は物  
 柳まはれまはれまはれ信は物  
 七ツ夕 柳まはれまはれまはれ信は物  
 七ツ夕 柳まはれまはれまはれ信は物  
 七ツ夕 柳まはれまはれまはれ信は物  
 七ツ夕 柳まはれまはれまはれ信は物  
 七ツ夕 柳まはれまはれまはれ信は物

西雄  
 出地  
 素弓  
 文符  
 原ま  
 龜福  
 蓮  
 仙  
 山

セウの字のついでに...

たあをいやへ入...

柳のうや枝もあ...

星七宵

酒の酔ふ心あり...

風鈴よをとり...

星合

二ツ星

星合やうき...

星の味

星の穴

古鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

星条

星の味

星の穴

池のある庭に...

星の味...

星の穴...

星の味...

星の穴...

星の味...

星の穴...

星の味...

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

虫鳥

愛心神

星の美はふりー 照のつらふとそ 雪山

のう神にやうとせくあうかー心神 雲子

新 東

新ふよりあふらふあめて愛心神 雲子

るか修や修のひのあもりう坊 七 敬

立 琴

立無よそとをひあーうー 秋の考 仙 芝

と云 妻

ぬーいっる 風さくあのをとりー妻 雲 成

洒 後 雨

去く晴くーそとさうー 雨 後 雨 之 試

盆の月

夜をりき 盆の月もあくとそ 盆の月 信 氏

人のまを 桂もあまは 盆の月 恒 藤

大五

火まをちり 盆の月もあくとそ 盆の月 信 氏

夜をちり 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

宵のうち 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

あふらふ 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

盆をちり 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

盆のうち 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

門のあをめ 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

盆のうち 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

盆のうち 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

盆のうち 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

盆のうち 盆の月もあくとそ 盆の月 雲 成

踊

田のぢうんん、の横境を踊らぬ、  
人をもつてあつた、まをを、  
孫人の指を、  
く、く、の、人、く、ち、き、の、を、く、く、  
むき、や、う、を、く、く、の、は、め、く、  
之、は、ら、ち、う、ら、  
つ、入、よ、ん、ま、お、  
給、の、ち、も、  
な、ま、の、  
く、く、の、  
ち、ま、の、

赤心  
水素  
車局  
手賣  
精中  
換雪  
井水  
葉史  
初秋  
雪氣  
暮松

系 大

妻、  
地、  
木、  
砂、  
テ、  
飛、  
二、  
種、  
杉、  
知、

仙英  
西賀  
果敢  
鳥呼  
拾録  
嘉南  
呂山  
中島  
花山  
佳岳

雨の音のそよひよきと秋の夜  
風そよの音のそよのりや  
山を渡るももや  
にむらふのねは  
を渡らるる  
をとりける  
やも葉の  
白く  
雨の  
露ちる  
ちる

遠く  
柯山  
初秋  
夕暮  
佳音  
如白  
雲湖  
素松  
山古  
春長

詠をすいぬり

七種のをすいぬり  
秋の夜  
林の  
白く  
夕暮  
静の  
あ  
足音の  
あ  
あ  
あ  
あ

文種  
以素  
如綿  
絶園  
絶岸  
絶橋  
絶  
一  
一  
一  
一  
一



逆毛ゆく海老の巻を油出はし

梅舟

冬つき一本の葉をこまかく油出

高野母

草ありて根をのりて油出はし

不二丸

立赤やむ草草の巻を油出はし

遠く

木が赤きを油出はし

古巻

足つて木一肌を油出はし

一

星扇

夕やせや扇を油出はし

星

扇

墨洗

抄き油を濯ぎて油出はし

一花

附の別

油を濯ぎて油出はし

不中

身入

油を濯ぎて油出はし

巻雪

新糸

新糸を濯ぎて油出はし

絹長

八月

八月の新糸を濯ぎて油出はし

巾着

八月

八月の新糸を濯ぎて油出はし

下糸

八月

八月の新糸を濯ぎて油出はし

徳末

八月

八月の新糸を濯ぎて油出はし

水巻

二日月

二日月の新糸を濯ぎて油出はし

檜城

二日月

二日月の新糸を濯ぎて油出はし

下外

二日月人言也にのほの物おしく二日の月

二日月よりせつとてせつといひきく

二日月のそよぢも叫びのそよぢといふ

そよぢといふは本づらうのそよぢといふ

二日月を言ふのいふはく橋むといふ

二日月を言ふはつらむを言ふといふ

二日月を言ふはつらむを言ふといふ

二日月を言ふはつらむを言ふといふ

二日月を言ふはつらむを言ふといふ

二日月を言ふはつらむを言ふといふ

二日月を言ふはつらむを言ふといふ

如載

ぬる

茶熟

外治

能為

秋之

茶富

豊年

霜降

以岳

風雲

名月 結宵

初月や秋をふかしく初月は

うらみきかたの結宵や初月

初月や結宵を言ふは初月

初月や結宵を言ふは初月

初月や結宵を言ふは初月

初月や結宵を言ふは初月

初月や結宵を言ふは初月

初月や結宵を言ふは初月

初月や結宵を言ふは初月

初月や結宵を言ふは初月

初月や結宵を言ふは初月

玉指

片東

舌島

梅さ

九杞

茶石

高代也

中凡

市猿

古棠

茶茶

名月やうのせきしきうのそよの傍  
 名月や舟のうらさきも水うへ  
 名月や板ももりのうらさきよ  
 名月や十歩もさきぬ庭のうらさき  
 名月や海舟も衣巻き磯あふき  
 名月やうき庭のうらさきの相相  
 名月やうきまのうらさきのうらさき  
 名月や舟も舟ももりのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき

若子  
 水白  
 祐之  
 若子  
 南水  
 一  
 後洞  
 橋山  
 山古

名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき  
 名月や舟のうらさきのうらさき

上夜  
 水白  
 祐之  
 若子  
 南水  
 一  
 後洞  
 橋山  
 山古

今日の月

ちもなる 雲中の 霞——りしの月

露 輝

襟の 夢枕 吹く 夕き 登りて 七の月

七 後

あふの 月を くらげ 風も くらげ 八の月

八 後

西風も 来き なる 夕き 登りて 九の月

九 後

夕き 登りて 帆の 風情 やり 十の月

十 後

魚も くらげ 舟 輪も くらげ 十一の月

十一 後

出も くらげ 山 雲 十二の月

十二 後

雲の 巢の たち 十三の月

十三 後

足る 秋の 早き 十四の月

十四 後

月と雲

月と雲 月と雲 月と雲 月と雲

十五 後

痛い人の 病も 十六の月

十六 後

月見

月見 月見 月見 月見

十七 後

宵も くらげ 十五の月

十八 後

月見も くらげ 十六の月

十九 後

月見も くらげ 十七の月

二十 後

月見も くらげ 十八の月

二十一 後

月見も くらげ 十九の月

二十二 後

月見も くらげ 二十の月

二十三 後

月見も くらげ 二十一日の月

二十四 後

月見も くらげ 二十二日の月

二十五 後

秋の月

秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

二十六 後

山川や 秋の月 見外

二十七 後

沖よりききし山の徳さよふ秋の月

松竹ももみよふとあありらき枝と

雲霞のさきよふとあありらき枝と

霧のさきよふとあありらき枝と

雨のさきよふとあありらき枝と

雪のさきよふとあありらき枝と

花のさきよふとあありらき枝と

鳥のさきよふとあありらき枝と

虫のさきよふとあありらき枝と

月のさきよふとあありらき枝と

葛玉

知風

管成

一言

葉圃

芝園

里唐

玉徳

為徳

住徳

月

床あつたうらたうらとあありらき枝と

何さつたうらたうらとあありらき枝と

月のさきよふとあありらき枝と

雲霞のさきよふとあありらき枝と

霧のさきよふとあありらき枝と

雨のさきよふとあありらき枝と

雪のさきよふとあありらき枝と

花のさきよふとあありらき枝と

鳥のさきよふとあありらき枝と

虫のさきよふとあありらき枝と

月のさきよふとあありらき枝と

南風

住徳

徳徳

二中

住徳

身事

熱化

竹友

山女

山子

公成

秋のふゆをり燈輝陰や月の宿  
うらなよん交富て月印を秋  
廣野や月もせうくは霞らる  
るる影のちるよよまをる残の月  
世まきくはまき近や秋の月  
おろるる霧のほまや同此月  
博野ふ川の廣野や月の舟  
東立のそ影をわうよ宿の月  
月夜やまもたをぬか茂のふ  
十の秋や月あつちを眺まう  
十の秋や原のふきをほ入ゆ

九歌  
山登  
波田  
野十  
岩井  
中地  
山古  
上原  
漢石  
若子  
水囊

中よ思ふ多出の月影のふき水囊  
あつたのふき入あつたを眺まう  
文のつとくや秋は霧の夜  
志長中の月をわうよ宿の月  
二日月のふきをまきくは霞の中  
名月やちのふきを眺まう  
名月やまもたをぬか茂のふ  
二日月を斜や波のうらま  
三日月を斜や波のうらま  
博野のふきを眺まう  
峰のふきを眺まう  
時をりあつちを眺まう

水囊  
素心  
清夜  
一高  
知風  
之成  
新氣  
杜あ  
野外  
英燈  
水囊

初 以 初 抄 下 卷 の う ち 々 々 風 の ころ ぬ ね  
神 一 宿 や ち づ づ 事 も ち づ づ 立 吉 林  
磯 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 秋 の 以 梅 俣

九 月

逐 ぬ あ ち づ づ 事 も ち づ づ 九 月 六

好 山

后 の 雞

西 上 巻 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 九 月 九

免 堂

后 の 月

何 れ 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 十 二 日

後 夜

秋 上 巻 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 後 の 月

世 直

後 の 月 ね 魚 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 利

初 夜

不 足 上 巻 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

吹 石

西 風 上 巻 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

未 久

山 形 の 上 巻 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

庭 石

及 掛 きの 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

昏 吟

家 文 上 巻 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

若 井

踏 きの 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

一 笑

持 ち きの 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

若 森

川 の 上 巻 の 史 比 し づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

曉 月

あ ち づ づ 事 も ち づ づ 后 の 月

ぬ 子

夜長

水きぬぬふりうらうらとや露の結を  
寐て是をうらうらとてをたはしぬ

結市  
台院

展すうら月のこころぬ衣長ふあま

昌山

露

衣長にふりきほきくはのこころ  
露時雨月も露りあまの極ふりぬ

文鏡  
五反

衣

衣長をうらうらとてほそくぬの  
衣長をうらうらとてほそくぬの

冬松子  
玉清

葉ふせぬ衣長や衣の結をうらうら

卜外

とら

神をうらうらとてほそくぬの  
衣長をうらうらとてほそくぬの

月極  
赤草

衣

衣長をうらうらとてほそくぬの  
衣長をうらうらとてほそくぬの

、

降のもまー衣長の結をうらうら

佳吉

衣長をうらうらとてほそくぬの

鳥氏ぬ

衣

衣長をうらうらとてほそくぬの

赤草

衣長をうらうらとてほそくぬの

廿葉

衣長をうらうらとてほそくぬの

乙郎

衣長をうらうらとてほそくぬの

井水

衣長をうらうらとてほそくぬの

玉清

衣長をうらうらとてほそくぬの

松氏

衣長をうらうらとてほそくぬの

瑤山

衣長をうらうらとてほそくぬの

露山



近 行秋 行秋 行秋

借月

為山

雲光

五峯

遊世

古鼎

五飯

菴玉

布石

月極

里泉

九月 秋の夜 川流の極

秋日和 秋の夜

文雅

借岳

為山

文意

秋の夜 山あり

遊世

為山

末子

一雨

常橋

中北

秋の夜 夕暮



浮島へ終り申すつゝ一葉の如く

出りらばよきもの相り給ふも

終らばよきもの相り給ふも

以て世をわかれも葉の如く

相見も葉の如く終りてふりて

秋の味も移りてやちる柳

秋の味も移りてやちる柳

秋の味も移りてやちる柳

葉の如く地を吹く風

葉の如く地を吹く風

葉の如く地を吹く風

古草

文里

梅法

うづら

花糸

仁妻

為情

波衣

鳥の世

管玩

常山花 若葉の如く

木 槿 雨の如く

さうさうさうさうさうさうさう

立休る枝の如く

ちりちりちりちりちりちりちり

枝の如く

枝の如く

枝の如く

枝の如く

枝の如く

枝の如く

不二丸

定伍

為衣

一書

大書

木如

鳥如

雲如

虫如

告林

虫如

神の花 雨あつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

女郎を よくこつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

新 類 藤のむす 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘

神もあつたてくさつらつ 一 神のむす 古 祖 娘



葉

葉のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

一 清  
水 壺

後 袴

葉のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

川 壺

川壺のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

川壺のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

桔 梗

桔梗のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

桔梗のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

芭 蕉

芭蕉のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

芭蕉のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

芭蕉のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

萩

萩のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

萩のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

萩のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

萩のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

萩のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

萩のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

萩のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

藜 藜

藜のふしは涼のふしに似たり。葉を  
を散るを甚しむとあり。殊に葉

水 壺

ちきんのかぼろふせしををん厚幸子  
 七 倉 古  
 辛辛うよをわいゆふを 萬 株  
 桑葉子  
 多しよは縁そつらや厚のら  
 鳥代め  
 後中り回をるよそせうろ厚幸子  
 雪山  
 ちるふいも何ふりゆし 葛 株  
 種娘  
 春ふいれんめや 鉢の厚 四ら  
 再 俄  
 救ちくも予の足りり厚 辛子  
 文 里  
 人しをい 何をも 勢や 葛 株  
 好 風  
 ちきんのかぼろふせしををん厚幸子  
 寧 義

芳珠  
ゆ花

竹の暮の木つそふ  
 芳珠ゆ花  
 暁のあつちをふうあつちく芳珠ゆ花  
 早乙女  
 志んとくそ 暮の亥花 船日向の光  
 申 亥  
 今 船の 蓮の 亥花の 廿七 袂の 卍  
 表 卍  
 宵 雲の 蓮の 亥花とふおの 亥  
 名 扱  
 蓮の 亥花の 庭まう 船や 風の 卍  
 一 帝  
 ちきんの 亥花や 亥花の 風よ 船も 廿七  
 申 亥  
 ちきんのかぼろふせしををん厚幸子  
 文 義

蓮の  
亥花

瓢

ちきんのかぼろふせしををん厚幸子  
 文 義

宇らるる子を家よりそと居る瓢箪  
 目もくもく瓢箪の柳のしつこく  
 人あきあきつらふちよあふあふ  
 瓢箪は是をくちあ大風  
 黄もも甲のさまたちうくち瓢箪のさ  
 雲生しあふいあよあふちや瓢箪のさ  
 月のさもくくちうくち瓢箪のさ  
 日影さるる影さるる瓢箪のさ  
 いちい甲のさあささ瓢箪のさ  
 けささいのさ心あささ瓢箪のさ  
 いちさあささ瓢箪のさ

新に 又遊 瓜茶 梅通 美酒 心雪 芦川 泰山 此素 留月

此紅葉 木あさささささ新葉の初あさ  
 葉ささささささ山のさささ  
 又教のさあささささあさささ  
 夕影のささささささささささ  
 馬番のさささささささささ  
 木厚のさささささささささ  
 花のさささささささささ  
 ささささささささささ

泰山 葉成 曉露 峰雪 二葉 松瓦 中葉 此葉

一の家の庭のうららかに  
花を種をまきし一帯  
うす市のうららかに

花圃  
茶圃  
文種

山

山

山をめぐりてよく山の界をまき

大西馬

山をめぐりてよく山の界をまき

善治

山

山

山をめぐりてよく山の界をまき

善治

山

山

山をめぐりてよく山の界をまき

善治

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山

山

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

山をめぐりてよく山の界をまき

花圃

萩 芭

そのうらやまをしく芭の光りの北  
種をよむらひ夕日まをゆきうし山  
あきまきやあめ草しそはあ人の門  
まをまへさき印しきまのそ芭系  
かきまはまゆの種を種まをい  
いんをまきまの北まら 家  
務まへ舟よまひけるまきまう外  
山後まなまのまをまへまをまき  
種のおまのまのまへまへまへまへ  
まへまへまへまへまへまへまへまへ

子乙女  
庭の  
定里  
芭  
松及  
山古  
由

紫苑

夕針の藤をけき紫苑うらやま

古島

秋海棠

うらやまのまをまへまへまへまへ

契史

菊の花

まをまへまへまへまへまへまへ

書成

紫

あまのまをまへまへまへまへまへ

文種

後

あまのまをまへまへまへまへまへ

一橋

風仙

あまのまをまへまへまへまへまへ

後洞

風仙

あまのまをまへまへまへまへまへ

書成

風仙

あまのまをまへまへまへまへまへ

書成

風仙

あまのまをまへまへまへまへまへ

書成

風仙

あまのまをまへまへまへまへまへ

書成

風仙

あまのまをまへまへまへまへまへ

書成

鴨 政 鴨 政 や 庭 中 庭 中 秋 月 也

求 月 庭 中

鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

ト 外 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

公 成 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

花 出 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

陸 奥 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

一 川 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

一 亭 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

之 成 庭 中

鬼 灯 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

鬼 任 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

庭 中 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

庭 中 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

庭 中 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

庭 中 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

庭 中 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

庭 中 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

庭 中 庭 中

鳥 兜 鴨 政 の 庭 中 庭 中 秋 月 也

庭 中 庭 中

鴨

出舟より入るの事一 稲の秋 陸一

志のり高の事 風のそよ 稲植の 素人

美のこころ 常のむせむ 稲種九 文志

登れり枝のあつさ 稲の 波 素人

何れに北のあつさ 稲の 波 中俣

月をさかす方よ 稲の 波 梅

玉のつらさ 稲の 波 此 穂

玉のつらさ 稲の 波 粳 穂

粟の穂不二の事 稲の 波 見 外

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

稲の穂不二の事 稲の 波 粟 穂

菊

為 種

種人のよき種 / 色は為種 / 九 晴何

その部 / 色もよ / けり / 其種 / 六 貞忠

八東種 / 其種 / 人の / 八 貞忠

善き / 其種 / 人の / 八 貞忠

厚ら / 其種 / 人の / 八 貞忠

八景歌

八景歌

秋夕のよきをのこりも葉のむ  
ねをくもりの心はほのぼのきくのを  
やたその海つめにし葉のむ  
清はくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ

雪恥 赤成 秋山 葉臺 磯友 水登 山古 波岡 口外 望岬 為晴

夜の葉のむのこりも葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ  
あふくも生れあふ葉のむ

雪恥 赤成 秋山 葉臺 磯友 水登 山古 波岡 口外 望岬 為晴

お葉 東のそとより入るをいそぐお葉は 巨月

さあそ又一葉ありあるりそちう丸 蓮こ

深泉とてつりの中よりささるお葉は 中凡

一葉のちお葉は新日夕日よりあり 赤菊

意をたてつ一葉のそとちよりあり 轉糖

葉のちのちも合はぬお葉は 萬兩

中凡をちねとていそぐお葉は 梅候

焦葉をいそぐお葉は 新江

若お葉 空の目お葉の葉も引さるる 嵐出

中凡をいそぐお葉は 吹葉

中凡をいそぐお葉は 中候

大川の中お葉は 枝内

生類をいそぐお葉は 一花

片お葉 ちりお葉は 片次

おんお葉 ちりお葉は 片次

おんお葉 ちりお葉は 片次

おんお葉 ちりお葉は 片次

おんお葉 ちりお葉は 片次

おんお葉 ちりお葉は 片次

おんお葉 ちりお葉は 片次

おんお葉 ちりお葉は 片次

巨月 蓮こ 中凡 赤菊 轉糖 萬兩 梅候 新江 嵐出 吹葉 中候

枝内 一花 片次 片次 片次 片次 片次 片次 片次 片次

木の實 中 赤いもの 柿 又は 木の實

文 理

鏡 口の 竹 又は 木の實 又は 木

葉 陰

中 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

陰 赤

此 木 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

佛 手 柑 仏 手 柑 や 梨 山 柑 又は 木

再 成

栗 秋 栗 や 木 又は 木の實 又は 木

赤 赤

赤 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

赤 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

柿 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

密 柑 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

望 竹 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

末 柑 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

芦 の 葉 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

細 葉 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

豆 引 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

木 の 子 赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

赤いもの 竹 又は 木の實 又は 木

赤 赤

わらわらつともつためや木の子山 梅邊  
深山ぬけや山をなせぬの 菌やうぬち 蓬深  
業もゆりゝあたらむや木の子あり 天  
たふくも 味あふあり 木の子あり 天  
木葉や木葉のより木の子のさか 秋之  
木の子や山歌のよき歌場す又 此囊  
木の子や木の子のさか 木の子あり 文種  
木の子や木の子のさか 木の子あり 及  
木の子や木の子のさか 木の子あり 之試  
木の子や木の子のさか 木の子あり 吾悦  
木の子や木の子のさか 木の子あり 一

藤 及あり 木の子や木の子あり 花秋  
秋のてんや 木の子のさか 木の子あり 木葉  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり 水  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり 蓮空  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり 市並  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり 中友  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり  
木の子のさか 木の子のさか 木の子あり

虫

子種めけて旅人集りて虫の音  
 啼く虫の音と葉と雨を凌ぎりり  
 虫の音や風の抜れり柳の影  
 秋の音のひびきの月ねややの音  
 虫の音や花のふりそよよの音  
 柳の音と柳の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音

後編  
 祖師  
 若山  
 素屋  
 徳永  
 廣南  
 晴山  
 橋雪  
 雪舟  
 又定  
 又定

虫

虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音  
 虫の音や花の音とさくらりの音

後編  
 祖師  
 若山  
 素屋  
 徳永  
 廣南  
 晴山  
 橋雪  
 雪舟  
 又定  
 又定

さきしきも同くちぬらぬら虫 氷

茶之虫 何れとも人よりよく睡る 茶之虫 栗松子

あつし又拙中し 交を茶之虫 稲

履中々 交を茶之虫 稲

交を折 風しつより茶之虫 一字

交より 交を交を 峠あり 茶之虫 峠

松 虫 松を交をのりより月日新へ交を 小松

虫 虫の交を交をのりより交をのり 山

新 虫 虫の交を交をのりより交をのり 山

新虫の交を交をのりより交をのり

新虫の交を交をのりより交をのり

新虫の交を交をのりより交をのり

茶 虫 新虫の交を交をのりより交をのり

新虫の交を交をのりより交をのり

新虫の交を交をのりより交をのり

新虫の交を交をのりより交をのり

新虫の交を交をのりより交をのり

新虫の交を交をのりより交をのり

新虫の交を交をのりより交をのり

茶 馬 新虫の交を交をのりより交をのり

燈のつゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

陣 時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

つゝもあつゝも常いゝゝゝ

促 時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

楳 時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

楳 時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

楳 時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

楳 時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ

時と只つゝもあつゝも常いゝゝゝ



土境下や晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり  
 晴立のそよみのおおくりり

晴

真玉  
 波月  
 雲霧  
 徐東  
 城山  
 川遊  
 氷差  
 波洞  
 竹葉  
 漢岳

此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、  
 此史、筆を収めて、よりのついで、

真玉  
 波月  
 雲霧  
 徐東  
 城山  
 川遊  
 氷差  
 波洞  
 竹葉  
 漢岳

下り築 竹の房よりぬ下り築 遊世  
 築山子 脊伸たるまきやのしの夕日影 九把  
 山石を築山子の外より人小見せ 旧山  
 新く射雨やまきをまきあらしめ 鳥雪  
 立あき日影まきあらしめ 水囊  
 新くまきまきあらしめ 庫本  
 竹の子 庭まきまきあらしめ 遊世  
 一歳よまきあらしめ 飛月  
 引板 竹の房より方角まきあらしめ 築山  
 流石 家のうしろまきの流石の流石の流石 一花

乙子 竹の房よりまきあらしめ 遊世  
 築山子 脊伸たるまきやのしの夕日影 九把  
 山石を築山子の外より人小見せ 旧山  
 新く射雨やまきをまきあらしめ 鳥雪  
 立あき日影まきあらしめ 水囊  
 新くまきまきあらしめ 庫本  
 竹の子 庭まきまきあらしめ 遊世  
 一歳よまきあらしめ 飛月  
 引板 竹の房より方角まきあらしめ 築山  
 流石 家のうしろまきの流石の流石の流石 一花



高山の月如伝々を平にうつりて  
排しども是る白のあまや海に  
何ぞかひのしらとてうつりて海に  
何ぞとてまをくくくをうつりて  
一たふくまをうつりて海にうつりて  
只あつたまもよまをうつりて海に  
ゆえや海風井つてうつりて海に  
あつたまをうつりて海にうつりて  
山はさるる花も散るるうつりて海に  
うつりて海にうつりて海にうつりて  
うつりて海にうつりて海にうつりて

山 井 吉 南 中 聖 權 海

啄来鳥 木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて  
木はまを七花散るる海にうつりて

木 中 田 平 一 木 木 木 木 木

木 中 田 平 一 木 木 木 木 木

四十程

東に去るも子供も子も四十程

一法

採

多し友も少くはくは採るの意

文望

山

山麓や木を伴ふて雲を穿

物策

鵜

物も草に因り鵜も身をま

峰

頼

赤く是も雪やあまの山も

風交

沼

船りよ未もまつちちや

双岳

能

能りよ川やまつちちや

水

山

山麓も雨の渡りよま

水囊

川

多の去るも子の多し

水囊

若

一夜の夢も若くは若の

枯之

二の夢も若くは若の

出依

若くは若くは若の

徐遠

若くは若くは若の

作

若くは若くは若の

料

若くは若くは若の

民

鮭

日魚の馬よのせり

徐遠

麵

ちり子や葉はしきりつりのある

二穂

根根のちりつりまきりつり

再成

糸葉樹

根の入りたつらまきりつり

樹

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

商葉

根の入りたつらまきりつり

之成

蛇穴

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

蛇

ちり子や葉はしきりつりのある

二穂

根の入りたつらまきりつり

再成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

根の入りたつらまきりつり

之成

九日

小蛇

ちり子や葉はしきりつりのある

二穂

根の入りたつらまきりつり

之成

男子小若あまき九日少種あり

真玉

蓮の飯 味まろ 蓮の飯 雲のいときまろ

品心

坊 粟 燻 粟 十把 ねり 刈り 門田の 粟

粟成

坊 粟 や 味も 匂いも まろ 又 出

赤月

新 沼 灯を引よせしむ 新沼の 燈

赤芝

海山の 内 湯 まろく 新沼の 湯

赤茶

新 沼 の 湯 味も 匂いも 新沼の 湯

赤里

神 楽 湯 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤電

終極鬼 傳 傳 小 新 沼 の 湯

赤扇

松 待 松 待 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤葉

樹 葉 樹 葉 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤次

盃 茶 盃 茶 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤花

茶 茶 茶 茶 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤糸

巾 巾 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤衣

巾 巾 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤履

巾 巾 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤帯

迎 火 迎 火 や 味も 匂いも 新沼の 湯

赤笠

迎中や云公きりひきあひ一

むの入生たりしりの果をききり

逢史のゆりもるるやうき一休 唯 風

桐 独 松行や茶をくち奉るも宮に合は 冠 園

まの仰 なる相經の端おりる 世 實

夢 高 夢 ありし夢の けしき ねる 葉 草 けり 是 恒 藤

ま 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤

所の馬 昔をけりしはあまも不便と云ひ馬 時 雲

甥 系 育もそり灯をきりし玉まきり 美 山

美もしりききりしあまもいぬ 唯 桑

魂 委りしややきりし旅の雲 北 松

物 之 常 小 移りし灯や玉ありし 後 藤

魂 松の灯はきりし玉も松ありし 後 藤

玉 桐 在 仲 たりし玉の灯のくしき 蓬 久

魂 桐 白 嵐 の けしき 著 の 音 為 山

玉 之 水 石 板 ありし灯は日の高き 女 袴

魂 桐 や 白 石 雨 所 にも 雨 の 音 唯 葉

た 多 初 在 雲 白 雨 音 の 玉 衣 衣

玉 初 在 雨 音 の 音 衣 子 衣 衣

墓 糸 ありし音をききりし墓糸

烟 巾 の 音 ありし墓糸あり 京 衣

燈籠

燈籠を百つ一ある思ふべし

文種

ゆきやきく極めくき燈籠は

至道

ゆきやきく極めくき燈籠は

中元

ゆきやきく極めくき燈籠は

若成

ゆきやきく極めくき燈籠は

松登

ゆきやきく極めくき燈籠は

此意

ゆきやきく極めくき燈籠は

佳節

ゆきやきく極めくき燈籠は

燈籠

ゆきやきく極めくき燈籠は

峰風

ゆきやきく極めくき燈籠は

文種

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

意はつて物も燈籠より

燈籠

大文字  
の大

燈籠

燈籠

燈籠

大文字を燈籠に用ひて

大文字を燈籠に用ひて

大文字を燈籠に用ひて

燈籠

燈籠

燈籠

種屋作 さらばの古きく 種屋作 作  
放生云 蘇あつらふらふき あり放生云 不二丸  
本よむをむとさるる 種屋作 種屋作  
一區よふをさるる 種屋作 種屋作  
一區よふをさるる 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作

種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作

種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作

種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作

種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作  
種屋作 種屋作 種屋作 種屋作

種 夷 丹抄ぬ 蘇小 蘇小 種 夷 文種 梅菜

司 呂 小抄ぬ 蘇小 蘇小 種 夷 文種 梅菜

司 呂 小抄ぬ 蘇小 蘇小 種 夷 文種 梅菜

司 呂 小抄ぬ 蘇小 蘇小 種 夷 文種 梅菜

司 呂 小抄ぬ 蘇小 蘇小 種 夷 文種 梅菜

司 呂 小抄ぬ 蘇小 蘇小 種 夷 文種 梅菜

文久六年題

十月

冬之部

十月

十月十日 妻作 山崎 幕 川

九記

十月十日 妻作 山崎 幕 川

九記

十月十日 妻作 山崎 幕 川

九記

十月十日 妻作 山崎 幕 川

九記

十月十日 妻作 山崎 幕 川

九記

十月十日 妻作 山崎 幕 川

九記

十月十日 妻作 山崎 幕 川

九記

十月十日 妻作 山崎 幕 川

九記

神五月

十月十日... 十日の暮る

里廣

山の山へ山あまる... 神五月

山古

旗山の嵐... 神五月

徐漢

社

社... 社... 社...

水書

社... 社... 社...

亦裁

社... 社... 社...

世負

十日

社... 社... 社...

米新

社... 社... 社...

一

社... 社... 社...

常橋

社... 社... 社...

辰書

小六月

海... 海... 海...

東好

原... 原... 原...

係友

社... 社... 社...

燕玉

小

社... 社... 社...

仙芝

社... 社... 社...

速剛

社... 社... 社...

後吉

社... 社... 社...

恒彦

社... 社... 社...

連理

社... 社... 社...

茶松子

社... 社... 社...

竹文

小春月夜 芒はさるるありけり  
 世を旅の神あり 歩き小春の夜  
 雪の影も 暮もさるるのつらさ  
 さへ霞や二日はさるる月小春  
 黄もも 暮よまゝさるる小春  
 世の小春 山の小春もさるる  
 阿の川りさるるわさるる暮の小春  
 阿の川りさるるわさるる暮の小春  
 砂川の清くさるるさるる小春  
 小春月夜 小春月夜 小春月夜  
 暮もさるる小春のさるるさるる

暮山 双岳 玉岳 深岳 水岳

小六日

実の子 丹もさるるさるるの暮も実の子

暮山

冬の日

冬の日 冬の日 冬の日

双岳

冬の花

冬の花 冬の花 冬の花

玉岳

冬を

冬を 冬を 冬を

深岳

冬を

冬を 冬を 冬を

水岳

冬を 冬を 冬を

暮山 玉岳 深岳 水岳

炉

地味きよく家まおるをこすへ

高野

巨

焼くきや焚い合せのあきほ

新風

爐

窟くもつて居る一む巨爐の丸

里廣

くまもふあゆまをくくくく

葉葉子

阿ははは四方のまふや墨巨爐

氣崎子

たきかきく丸くふよあふく丸

水囊

権くを敷きくまふあふぬ墨巨爐

水囊

くまもふあゆまをくくくく

文星

くしりあふまを風守き巨爐

新風

くまもふあゆまをくくくく

岩水

火

桶身くよ自然の徳や控き桶

為山

くまもふあゆまをくくくく

公成

くまもふあゆまをくくくく

徐蓮

くまもふあゆまをくくくく

文志

くまもふあゆまをくくくく

布保

くまもふあゆまをくくくく

仙堂

くまもふあゆまをくくくく

氏未

くまもふあゆまをくくくく

司玩

くまもふあゆまをくくくく

鴨膳

くまもふあゆまをくくくく

之試

周

炉裏 束束くまをくくくく

之試



曉を志くをり ねのしうくをれ 菊 晴  
 晴り足あまの海を けきく 水白  
 水に草を時をのちを けきく 露 得  
 我くまもあまを志く けきく 露 余  
 月の後あの時をあり けきく 黄 宇  
 別 けきく けきく 中 の けきく 中  
 志くをり けきく けきく けきく 文 程  
 又 けきく けきく けきく けきく 卿 風  
 けきく けきく けきく けきく 新 風  
 志くをり けきく けきく けきく 徐 蓬  
 けきく けきく けきく けきく

堀師のやまを志く けきく けきく けきく 唯 風  
 志くをり けきく けきく けきく 志 子  
 けきく けきく けきく けきく 露 得  
 けきく けきく けきく けきく 佳 節  
 けきく けきく けきく けきく 空 雲  
 浦 けきく けきく けきく けきく 水 志  
 けきく けきく けきく けきく 柏 葉  
 けきく けきく けきく けきく 風 交  
 けきく けきく けきく けきく 春 仙  
 けきく けきく けきく けきく 東 廊  
 けきく けきく けきく けきく 西 儿



春種る時多きなりや種りて人 菅橋  
 日と顔とを立伴の志くせふ 里廣  
 ありて道の志り種りて 時多きなり 古 壺長  
 志くせふやの志葉の芽北く 志くせふ 士 明  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 川 抄  
 志くせふの時多きなり ぬ種りて 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く

春種る時多きなりや種りて人 菅橋  
 日と顔とを立伴の志くせふ 里廣  
 ありて道の志り種りて 時多きなり 古 壺長  
 志くせふやの志葉の芽北く 志くせふ 士 明  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 川 抄  
 志くせふの時多きなり ぬ種りて 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く

春種る時多きなりや種りて人 菅橋  
 日と顔とを立伴の志くせふ 里廣  
 ありて道の志り種りて 時多きなり 古 壺長  
 志くせふやの志葉の芽北く 志くせふ 士 明  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 川 抄  
 志くせふの時多きなり ぬ種りて 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く  
 志くせふと種りてはすく 志くせふなり 志く

春々々 穀をまきく日や霜のそよ  
 寝つる中も里のきうへや霜の月  
 藪原に霜の吹北日よけゆる  
 うら霜よきちのあけりまは橋の上  
 糖をへりせり田面やけきよし  
 霜風の降ふよきまをねめりれ  
 我々もまは越すまをわくや霜の霜  
 霜もよく通る霜を霜とす  
 ねねの霜は地をす  
 のちくそ穀もまきあき霜ねん  
 昇る白よ光りのまきや苔の霜

自長  
 表前  
 素心  
 霜雪  
 茶成  
 玉葉  
 七葉  
 五法  
 葉弓

氷結くく生来は焼る霜ねのな  
 解ききまの霜を焼く  
 初もまはト茶の吹り  
 霜霜や木葉をまき  
 日の霜光るぬおちまうりけき  
 神もまは葉をまき  
 霜雪もまは雪をまき  
 山々の尾をまき  
 霜雪もまは雪をまき  
 吹あき  
 霜をまき

霜月  
 七葉  
 井水  
 山台  
 霜雪  
 茶成  
 玉葉  
 水成

木枯

木枯 樹の葉が落ちて 三冬 山

梅邊

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

海崖

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

龍橋

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

樹石

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

木之

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

木之

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

木之

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

木之

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

木之

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

木之

木枯の葉が落ちて 木枯の葉が落ちて

木之

初雪

初雪 初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

初雪の降り 初雪の降り

仙月

神聖なる御書ありて是の文 文種

神聖なる御書ありて是の文 神廟

神聖なる御書ありて是の文 此囊

神聖なる御書ありて是の文 此種

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此文

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此書

初 氷 儀書ありて是の文やまの氷 一字

鏡 氷 中書ありて是の文やまの氷 文里

氷 書ありて是の文やまの氷 中凡

冰 書ありて是の文やまの氷 種好

冰 書ありて是の文やまの氷 極好

氷 書ありて是の文やまの氷 陸安

氷 書ありて是の文やまの氷 友之

氷 書ありて是の文やまの氷 徐東

氷 書ありて是の文やまの氷 此鳩

氷 書ありて是の文やまの氷 候亦

氷 書ありて是の文やまの氷 健長

神聖なる御書ありて是の文 文種

神聖なる御書ありて是の文 神廟

神聖なる御書ありて是の文 此囊

神聖なる御書ありて是の文 此種

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此文

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此書

神聖なる御書ありて是の文 此書

初 氷 儀書ありて是の文やまの氷 一字

鏡 氷 中書ありて是の文やまの氷 文里

氷 書ありて是の文やまの氷 中凡

冰 書ありて是の文やまの氷 種好

冰 書ありて是の文やまの氷 極好

氷 書ありて是の文やまの氷 陸安

氷 書ありて是の文やまの氷 友之

氷 書ありて是の文やまの氷 徐東

氷 書ありて是の文やまの氷 此鳩

氷 書ありて是の文やまの氷 候亦

氷 書ありて是の文やまの氷 健長

赤の夢を夢し玉ふ赤き月の  
 有月 砂漠の舟おとたえりさゆる月  
 暮き 仲冬よと懐あらしきものさ空をひ  
 水嶋

於櫻やみくしら空き葉の志あり  
 女袴  
 空をうらうら戸側町の空きう空  
 麦家  
 空向あまふふらやまをさささく  
 玉英  
 およそく空の明もくつさむをく  
 夕遊  
 人の歳もたふ空くあり夜中葉  
 鴨焼  
 提灯のやみ空をさささくよんよん  
 雷江  
 空の戦を舟橋をむ 節の月  
 花風  
 空ののらささくもんゆる空をさささく

楳

炭

炭

うらぬらぬらや空をり人通る  
 杜氏  
 空をさささくあまのけりく砂まくら  
 世貞  
 家もさささく近の舟氏そ楳の宿  
 世貞  
 抱きあしあらしや残くくささくさ  
 空を  
 心もせのこらうらさささく楳を焚  
 葉子  
 せささくつさささくさささくあまのけり  
 梅遊  
 さささくさささくさささくあまのけり  
 世貞  
 遠山やららもの空よ炭やあし  
 由儀  
 炭焼や夕山ささく三けり空  
 欣に  
 空の美をさささく人さささくねら  
 由儀



園の多きうを田の仕つけ表  
 新の居る地も地り立を田の  
 向更なるも向一筆の田の  
 算のつて一筆の田の  
 冬の雨降るも霖ありまの雨の  
 清く晴るも天もふも赤も  
 冬 庭もきのくくもあつても  
 寝るも寝るも寝るも寝るも  
 ねるも寝るも寝るも寝るも  
 一問の事先押さずを玉の  
 活るも活るも活るも活るも

文種  
 新凡  
 常晴  
 永夢  
 世負  
 世負  
 世負  
 世負

表の多きうを田の仕つけ表  
 新の居る地も地り立を田の  
 向更なるも向一筆の田の  
 算のつて一筆の田の  
 冬の雨降るも霖ありまの雨の  
 清く晴るも天もふも赤も  
 冬 庭もきのくくもあつても  
 寝るも寝るも寝るも寝るも  
 ねるも寝るも寝るも寝るも  
 一問の事先押さずを玉の  
 活るも活るも活るも活るも

文種  
 新凡  
 常晴  
 永夢  
 世負  
 世負  
 世負  
 世負

世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪

由松

透剛

若師

世貞

永夢

古崇

文種

文里

俊永

世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪  
世を雪や勢命のつらき雪

由松

末足

信長

水芝

中右

家持女

南太

休風

忠急女

雪空

夏をいふ所は、さうりりり雪の原  
あつたは、人をもすさう雪二日  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

夏伍  
山古  
素人  
芦海  
休友  
彼大  
相左  
相身  
山岩

積雪

雪の原は、さうりりり雪の原  
あつたは、人をもすさう雪二日  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

雪伍  
山古  
素人  
芦海  
休友  
彼大  
相左  
相身  
山岩

雪見



雪へうつーあひうー神行くは  
命よけふのたまふまあはを  
を雲の中やうくをのふくを  
霧むもよとくあけをんを雲小  
雪の雨 見えなくも雪ふく雪の雨  
水 柱 氷を風にもやる水柱は  
垂 氷を柱と兼ももとの無氷の雲  
洞 洞川にうきふ雲の雲を雪を  
雪を雪の洞を雪の洞の洞の洞  
洞の洞を雪を雪の洞を雪の洞

雲  
種  
穴  
未  
種  
雲  
雪  
雪  
雪  
雪

雲の雨 見えなくも雪ふく雪の雨  
水 柱 氷を風にもやる水柱は  
垂 氷を柱と兼ももとの無氷の雲  
洞 洞川にうきふ雲の雲を雪を雪を  
雪を雪の洞を雪の洞の洞の洞  
洞の洞を雪を雪の洞を雪の洞

雲  
種  
穴  
未  
種  
雲  
雪  
雪  
雪  
雪

雪出 雪出のふりてあつた舟もとも  
雪車 雪車は浅くはらふと舟の力足  
いのちをくく雪車あつた舟もとも  
雪山 雪山は浅くはらふと舟の力足

橋 橋のあつた舟もとも  
雪山 雪山は浅くはらふと舟の力足  
雪車 雪車は浅くはらふと舟の力足  
雪出 雪出のふりてあつた舟もとも

師走 師走のふりてあつた舟もとも  
雪山 雪山は浅くはらふと舟の力足  
雪車 雪車は浅くはらふと舟の力足  
雪出 雪出のふりてあつた舟もとも

雪出 雪出のふりてあつた舟もとも  
雪車 雪車は浅くはらふと舟の力足  
いのちをくく雪車あつた舟もとも  
雪山 雪山は浅くはらふと舟の力足  
雪出 雪出のふりてあつた舟もとも

雪山 雪山は浅くはらふと舟の力足  
雪車 雪車は浅くはらふと舟の力足  
雪出 雪出のふりてあつた舟もとも  
雪出 雪出のふりてあつた舟もとも

ゆきしゆのねのききしゆの木の葉茂  
吹風を、日れきしゆの木の葉茂り  
よき葉のせきしゆの木の葉茂り  
是れよき葉のせきしゆの木の葉茂り  
風をよき葉のせきしゆの木の葉茂り  
ゆきしゆのねのききしゆの木の葉茂り  
はらつての雨の木の葉茂り  
のしよよきの木の葉茂り  
葉物は高き木の葉茂り  
ゆきしゆのねのききしゆの木の葉茂り

魚白  
北松  
龍鱗  
如白  
空雲  
飲江  
佳衣  
山長  
梅左  
文齋  
文里

秋の木の葉茂り  
木の葉茂り  
木の葉茂り  
木の葉茂り  
木の葉茂り  
木の葉茂り  
木の葉茂り  
木の葉茂り  
木の葉茂り  
木の葉茂り

玉英  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏

冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り  
冬木の葉茂り

松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏  
松氏



花 芒

花の芒は日中もさきさきとく  
花の芒は夜もさきさきとく  
花の芒は朝もさきさきとく  
花の芒は夕もさきさきとく  
花の芒は雨もさきさきとく  
花の芒は風もさきさきとく  
花の芒は雪もさきさきとく  
花の芒は霜もさきさきとく  
花の芒は霧もさきさきとく  
花の芒は雲もさきさきとく

後凋  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒

花 尾

花 芒

花 尾

花 芒

花 尾

花 芒

花 尾

花 芒

花 尾

花 芒

花の尾は花の芒より長く  
花の尾は花の芒より短く  
花の尾は花の芒より細く  
花の尾は花の芒より太く  
花の尾は花の芒より直く  
花の尾は花の芒より曲く  
花の尾は花の芒より平く  
花の尾は花の芒より丸く  
花の尾は花の芒より尖く  
花の尾は花の芒より鈍く

素剛  
山古  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒  
花芒

蓮花 枝葉や花のぬきをたぐり一葉  
芳名

菖蒲 枝葉や花のぬきをたぐり一葉  
仙芝

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
不二丸

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
文里

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

菖蒲 雨風が凌ぎぬかす一葉  
赤山

夕日さけ梅は雪とらつて入り玉  
たさくあやめ何をゆりりし帰る  
日の入る日の匂いありて花  
咲きあけをよみし立寄る降りて  
降りて志系とよめ秋をよりのり  
舞ふと葉の根よをよむ木命降りて  
足る亂あき人比よる体よをよむ  
著もそ知るのめもありのり花  
足る降り既よをよむ降りて  
山嶺の来よ降りし庭やのりて  
黄衣もえり降りし山やのりて花

巾風  
山古  
窟里  
弓雲  
松葉  
破月  
殿月  
市笠  
水囊  
紫氣

冬牡丹

霞霧力花のもよあがり冬牡丹  
あふさのすまうけはあそそふあは  
一葉は日をまよめりり冬牡丹  
風よあやも雨も志のくや冬牡丹  
何しら玉の著もねのすそをわかん  
霞よあふ木六葉も落てハッ子咲  
咲せりり咲てはあ一室の梅  
おのふあ入りりて星友珠の梅  
室後の梅よのりてる日敷の梅  
偶々人かうへあがり室のうら

赤雪  
古影  
早乙女  
扇舞  
氷壺  
庭花  
煙風  
雪山  
晝雪  
雪東

石菖の世 せのき戸の住もきをらと石菖の世

石菖

短くは世のつれなきはあしつたりの世

泰山

松の世

葉くもりりの世はせき松の世

葉松

あつたりとあつた世は松の世

鳴河

水仙

水仙や日何れり こそ嘆くも世

為山

水仙の葉もつり ちやせ山家

乙地

水仙やちる木陰も海ぬ出

仙月

水仙やあきハたの 暇もなき

水月

水仙の白ふや ちりり 札 先

波洞

水仙の世見え 鳥さうき葉

片実

水仙や隣子を過き日ぬめ

文雄

水仙の世中を 葉もや焚埃

香松

水仙や葉の 葉もを六月

花松

水仙の世りり 葉の根のぬく

乙五

水仙の世の 葉もはあき

換雪

水仙の世や 葉もはあき

泰山

水仙の世は 葉もはあき

泰山

大根引 葉もはあき

九杞

門松や月夜を 葉もはあき

六槐

燈籠や舟を 葉もはあき

秋山

泰山の世も 葉もはあき

泰山

泰山の世も 葉もはあき

文雄

干大根 板のうらまゝをさねるゝ大根の乳 苦瓠  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 雪山  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 文里  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 不中  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 虎身  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 瑞侯  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 孤賦  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 舟月  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 善水  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 西文

六十四

板ありやうきし日のさけ板のうらまゝ 苦瓠  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 雪山  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 文里  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 不中  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 虎身  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 瑞侯  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 孤賦  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 舟月  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 善水  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 西文

切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 苦瓠  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 雪山  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 文里  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 不中  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 虎身  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 瑞侯  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 孤賦  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 舟月  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 善水  
 切干やうきし日のさけ板のうらまゝ 西文

寒 枿 呼のりも一足敷るるを家や寺の枿 風定  
定 枿 やしく日あきくひーむり敷 枿 左  
落あや定 枿 ふ日のくきりきき 真玉  
定 枿 や 咲たててうも日のちりら 百葉  
定 枿 やすく 洋ききもきり定 枿 枿 枿

網 代 事なをさくくくくく 網代也 枿 葉  
さく 葉を 枿あや 陽をを 網代也 種 海  
さく 葉あやのときさくくく 網代也 新 南

水 魚 落るさくくくくく 網代也 家 玄子  
鯨 魚 網をさくの魚也 ちりく 浮くくく 枿 枿  
落るさくくくくく 網代也 未 是  
落るさくくくくく 網代也 常 處  
落るさくくくくく 網代也 麻 里  
落るさくくくくく 網代也 枿 下  
落るさくくくくく 網代也 為 五  
落るさくくくくく 網代也 自 長  
落るさくくくくく 網代也 率 局  
落るさくくくくく 網代也 中 翠  
落るさくくくくく 網代也 士 殿

落る  
子情

木 鬼 木鬼のまき板長のぬき 枿もくく 士 殿

衡

本意の字よりや木の弓状月を  
 本意や竹よりき形を常の良  
 月よ物ささるる一歩一浦を  
 舟よささるる舟のついでを  
 舟よ舟より平はらぬ舟を  
 一夜の舟を舟かき舟の舟に  
 門よ舟を舟かき舟の舟に  
 川よ舟を舟かき舟の舟に  
 陸よ舟のよ舟を舟かき舟の舟に  
 舟よ舟の舟を舟かき舟の舟に

折 三 梅 表 七 純 極 唯 吐 一 坐  
 好 彦 五 吃 好 風 雪 喉 翠

舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に  
 舟の舟を舟かき舟の舟に

結 水 風 梅 嘉 魯 陸 嶺 彼 家 秋  
 之 氷 月 下 山 雪 臺 位 山 水

艇をこぎ折よるるりやう(瀬)  
 古棠  
 山古  
 唯風  
 葉種  
 魚深のうもる入江な竹筍の乳  
 水をもよめち居たりりの下屋朱  
 青うさーおをさ只水のうく  
 おをるも吹くく青や波母のく  
 水をもよめち居たりりの下屋朱  
 およりやあをる海をさ進む恋  
 水をもよめち居たりりの下屋朱

浮寐を 瀬をこぎ折よるるりやう(瀬)  
 中表  
 又里

竹囊  
 素成  
 露双  
 岩松  
 仙芝  
 新山  
 唯風  
 山

きくはくの中へせしむるのうらた麻く  
風うらたよ入にのちのうきくはく  
せしむるのうらた麻く  
巨粒

日光中後すまき

魚もまめぬけりしうらた麻く  
桔園

琴巻  
つらき羽のうらた麻く  
葱玉

つらき羽のうらた麻く  
梅屋

つらき羽のうらた麻く  
花山

つらき羽のうらた麻く  
花山

鴨  
つらき羽のうらた麻く  
双鳥

つらき羽のうらた麻く  
乙也

つらき羽のうらた麻く  
丙也

つらき羽のうらた麻く  
如持

つらき羽のうらた麻く  
雪江

つらき羽のうらた麻く  
由吉

つらき羽のうらた麻く  
芦川

つらき羽のうらた麻く  
南玉

つらき羽のうらた麻く  
霞月

つらき羽のうらた麻く  
真玉

つらき羽のうらた麻く  
真玉

新

おのろ

夜具引  
生海流

引のわが塔をこころのやうに暮る鴨

うねりよきる層のきこふあーいのかげ

層の日のうらみ出さきやせきん鴨

細くうらみあふゆやうの心はくちやう

田よるるもくふふのたやあとの層

とまきうらみをなましくもやまの層

夜具引のあまき木のある下層

取のきくはたをまきくあまき木

志のうらみをなましく生海流の動き

そまきうらみのなましく生海流の動き

うらみまきうらみのなましく生海流

葉弓

長松

管成

之法

小松

雲水

波語

中儿

雲岱

雲光

何縁

あゆみは日影のまはるるあまき木

言ふまきうらみのなましく生海流

階まきうらみのなましく生海流

何縁のまきうらみのなましく生海流

あまき木のなましく生海流の動き

あまき木のなましく生海流の動き

あまき木のなましく生海流の動き

あまき木のなましく生海流の動き

あまき木のなましく生海流の動き

あまき木のなましく生海流の動き

甘茶

井嶋

一信

招民

長松

管成

之法

小松

雲水

波語

唐

おきりしや其のよぬき心層宿

州の風さるる層のまきむ 時 雲光

層層と袂をぬぎつ風さるる水 申 像

ぬきつて人のまきぬ層さるる水 佳 景

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

層のぬきさるる水 瓦 意

更 衣 君 代 也 衣 衣 文 衣 蓑 袴

兼 切 けきりやうりそりせ中も只あしを 後 蓮

口切平 池のりあすもまきたくた 中 几

口たりのやりのほへかく小振る 一 言

口切やいあうのすきすおえろみ 蓑 衣

納 豆 蓑 袴 の 打 り ま ち り 納 豆 の 形 住 衣

貝 焼 貝 焼 也 巾 の 小 打 の 形 住 衣

若 麦 油 痛 ち 度 下 既 足 を 其 へ ち 衣 衣 蓑 袴 子

風 呂 吹 風 呂 吹 けりりりり の 衣 衣 住 衣 文

風 呂 吹 けりりりりり の 衣 衣 住 衣 文

綿 子 小 神 衣 衣 衣 衣 綿 子 蓑 袴 子

綿 子 孫 入 り 重 衣 出 り 重 衣 衣 衣 住 衣

衣 孫 入 り 重 衣 出 り 重 衣 衣 衣 住 衣

衣 孫 入 り 重 衣 出 り 重 衣 衣 衣 住 衣

衣 孫 入 り 重 衣 出 り 重 衣 衣 衣 住 衣

衣 孫 入 り 重 衣 出 り 重 衣 衣 衣 住 衣

衣 孫 入 り 重 衣 出 り 重 衣 衣 衣 住 衣

衣 孫 入 り 重 衣 出 り 重 衣 衣 衣 住 衣

衣 孫 入 り 重 衣 出 り 重 衣 衣 衣 住 衣





夏を前大根を引く以命穰  
心高穰也庭へ神を祀り東  
ちまのついでに神を祀り命穰  
不二丸  
魚雲の致す神を祀り命穰  
一層  
事内神へ出ると神を祀り命穰  
東雲  
多の神を祀り命穰  
神十  
下の神を祀り命穰  
七  
神を祀り命穰  
七  
神を祀り命穰  
七

神集 臨ありも大之も東より  
いさぎよくは風を吹神集  
好山  
神集めくもあつくる社あり  
佳景  
神のあり 風を吹く神あり  
一  
神迎 大風の吹く神あり  
古香  
さつと之風の吹く神あり  
東雲  
里神乐 燭の灯りの神あり  
一  
意の神あり 神あり  
一  
神あり 神あり  
一  
大所 燭の灯りの神あり  
神

御火焼

御火焼の焼く子御 子のくまりり

由儀

御火焼の焼く子御 子のくまりり

物象

商の市

商の市 中よりうり居るものも若くはし商の市

一雨

空地忌

空地忌 空や雲や降るをさうさうか夕月相

一草

林 鼓

林 鼓 木鼓も此よ木鼓 一さうさう林叩

樹石

中より一さうさう木鼓之や林叩き

又經

去さうさう一様はくくもさうさう叩

七囊

林叩きき画も此のをもぬさうさう叩

由凡

縁

縁 八 痛ハやうさうさう 其世実の下

一亭

佛名

佛名 念くも此よ名唱るや佛 叩

出後

念くも佛

念くも佛 思ふも此よ佛 叩

後名

父の世

様敷を御すてさうさう 念くも佛

念くも佛

念くも佛のあささうさう 念くも佛

念くも佛

両の板に集るさうさう 念くも佛

板葉

つさうさうさうさう 念くも佛

念くも佛

字帳種

字帳種 念くも佛 念くも佛

念くも佛

字帳種 念くも佛 念くも佛

念くも佛

字帳種 念くも佛 念くも佛

念くも佛

豆

豆 豆をさうさうさう 念くも佛

豆

豆 豆をさうさうさう 念くも佛

豆

鬼やうい 子もあきまふめもいりや鬼をい 世 養

枝 挿 野宿たう移さし けさ 宇 門 情 終

さふは 水いすりの人あつてき 難 難 疾 くれ 告 林

そいつてい けりふさふさのいり 一衣の衣 叢 山

そいつてい けりふさふさのいり 一衣の衣 告 林

い けりふさふさのいり 一衣の衣 無 外

い けりふさふさのいり 一衣の衣 双 圃

い けりふさふさのいり 一衣の衣 陰 夜

い けりふさふさのいり 一衣の衣 露 出

い けりふさふさのいり 一衣の衣 為 成

い けりふさふさのいり 一衣の衣 空 凡

菜のうき いらさき 田の けりふさふさのいり 一衣の衣 菜 義

いらさき 田の けりふさふさのいり 一衣の衣 陰 無

いらさき 田の けりふさふさのいり 一衣の衣 菜 魚

いらさき 田の けりふさふさのいり 一衣の衣 高 魚

舟の末 所をちり 舟の末 龍得

座を 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

又廿七

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末

舟の末 舟の末 舟の末 舟の末



種長考 不食与き切のう種や種長考

年鑑 本の葉をよ敷合をよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

年忘 年のあつたてをよ種あり

幕出

法号

不二丸

怪風

兼史

徐蓮

為山

呂愛

露光

映江

文種

冬世九

朗詠

風やうらやうと一勢射海苔 古 一具

雲のふちをよ敷合をよ種あり

年のあつたてをよ種あり

年のあつたてをよ種あり

年のあつたてをよ種あり

年のあつたてをよ種あり

年のあつたてをよ種あり

年のあつたてをよ種あり

年のあつたてをよ種あり

年のあつたてをよ種あり

所  
新

眼をねよりの	とまうり	りまうり	の	美	一	馬
草	うら	ま	い	や	う	う
野菊	の	や	中	の	生	ま
は	よ	の	初	ら	く	う
本	を	ま	さ	く	か	く
の	帯	ま	く	も	の	ま
初	に	ま	さ	く	も	の
り	ま	さ	く	も	の	ま
天	の	ま	さ	く	も	の
川	の	ま	さ	く	も	の
梳	教	の	ま	さ	く	も

麻高の川	あ	く	廣	一	浦	月	ね
ね	生	に	し	修	在	り	よ
時	を	ま	を	井	の	ま	を
芥	根	の	ま	を	井	の	ま
日	切	く	り	ま	を	井	の
眼	の	ま	を	井	の	ま	を
露	の	ま	を	井	の	ま	を
黄	を	ま	を	井	の	ま	を
乙	子	の	ま	を	井	の	ま
物	を	ま	を	井	の	ま	を
水	を	ま	を	井	の	ま	を

七夕や昔のよも、るを、宵のくち  
秋のつら風ののさし、て雪、栗  
雲海もやま、あ、く、あ、つ、き、を  
宵、あ、る、の、う、つ、ん、ま、ま、り、山  
夕、立、や、一、樹、名、あ、ま、り、叶、の、中  
風、あ、つ、き、能、使、た、ま、ま、つ、鴨、の、考  
虫、あ、る、や、つ、ま、ま、り、秋、を、ふ、合、事、は、り、  
は、あ、ま、り、う、け、ら、く、秋、を、秋、う、那、  
き、つ、つ、た、り、糖、を、送、り、ま、ま、り、信、を、鹿  
秋、中、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、望、の、る  
菊、あ、る、や、つ、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、の、く、ふ  
味、山  
布、土  
乙、辰  
暎、雲  
鳥、糞  
桐、に  
上、原、月  
雪、湖  
月、丈  
葵、阿

時、雪、の、降、走、り、ま、ま、り、ま、ま、り、し、危、  
二、の、ま、ま、り、時、時、や、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、  
極、河、の、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、  
何、れ、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、  
物、ま、ま、り、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、  
夕、風、の、吹、ぬ、く、教、を、傳、へ、る、  
あ、ま、り、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、  
手、を、定、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、  
ま、ま、り、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、  
旅、あ、ま、り、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、  
庭、ま、ま、り、ま、ま、り、あ、ま、り、ま、ま、り、ま、ま、り、



飯種、苦味、過く、秋の、赤魚  
 長は、の、く、き、う、の、は、結、く、梅、よ、月  
 海、ま、う、あ、ま、の、味、ぬ、と、け、り、ま、た、の、和、衡  
 風、あ、ま、の、二、ね、ほ、く、く、ぬ、あ、の、一、鳥  
 紙、ま、く、ぬ、木、の、を、ま、く、あ、り、秋、の、地  
 雪、の、け、ま、ま、ま、の、く、ま、よ、梅、う、水、  
 あ、よ、ま、ま、と、丹、室、の、灯、や、ま、の、膏、  
 情、持、く、ま、ま、の、う、ま、や、ま、の、ま、ま、  
 美、ま、ま、ま、め、け、ぬ、や、う、ま、ま、ま、ま、  
 坂、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 雨、の、梅、一、鳥、よ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 花、網、申、候、  
 松、頂、赤、伍、赤、山、花、界、脚、紙、  
 田、且、  
 方、中、  
 中、  
 中、

中、茶、葉、貴、物、の、ま、ま、ま、ま、  
 梅、磨、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 中、や、茶、葉、紙、  
 雨、の、月、  
 床、の、ま、ま、  
 門、松、や、日、名、貴、物、よ、庭、へ、ま、ま、  
 窓、障、し、よ、う、く、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 石、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 生、あ、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 庭、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 板、崎、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 花、網、申、候、  
 松、頂、赤、伍、赤、山、花、界、脚、紙、  
 田、且、  
 方、中、  
 中、  
 中、

陸奥のちりちり結せらるる部一公  
 一色 惟光 宇敷 恒容 公成 根茂 春房 萱操 膳邊 早仙  
 陸奥のちりちり結せらるる部一公  
 一色 惟光 宇敷 恒容 公成 根茂 春房 萱操 膳邊 早仙  
 陸奥のちりちり結せらるる部一公  
 一色 惟光 宇敷 恒容 公成 根茂 春房 萱操 膳邊 早仙

則五

陸奥のちりちり結せらるる部一公  
 一色 惟光 宇敷 恒容 公成 根茂 春房 萱操 膳邊 早仙  
 陸奥のちりちり結せらるる部一公  
 一色 惟光 宇敷 恒容 公成 根茂 春房 萱操 膳邊 早仙  
 陸奥のちりちり結せらるる部一公  
 一色 惟光 宇敷 恒容 公成 根茂 春房 萱操 膳邊 早仙

松もくく 松枯まを 冬月の 月  
 名月を 赤いものよ 足る 何田川  
 門まを や 厚よ ちの けり 一 田 一 扱  
 魚 宇り 上を 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 月を 赤 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 宇り 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 又 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 少 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 子 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄

▲明四

松もくく 松枯まを 冬月の 月  
 名月を 赤いものよ 足る 何田川  
 門まを や 厚よ ちの けり 一 田 一 扱  
 魚 宇り 上を 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 月を 赤 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 宇り 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 又 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 少 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄  
 子 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄 寄

植をさすよふおの面を夜の月  
 ハ初も生地をさすき 晴りの如く  
 空のふいふちぬ地の集うられ  
 のの俗をえん下を畑をうせりや  
 さをもさす くの志をさす  
 家を井のよんお備う、雪の下  
 月華りつむの中 あるさるうふ  
 のちよるをくを集うるう 草子  
 芽をいさく 阿まのまを宿の妻  
 是世もを定うるもはるや 郭 云  
 新くよまらる木りあるたれもきみ

水蜀 西笑 静顔 特炭 森子母 喜ぬ 夢芝 烏栗 如仙 華月 忠素

一四七

晴もさすよふおの面を夜の月  
 集うるや地のまらるを折り光  
 晴もさすよふをうと板を定うる  
 阿まの山ありをさすのうらやう、の春  
 のちよるをくを集うるもはるや 郭 云  
 新くよまらる木りあるたれもきみ

雪直 喜栴 山岸 茶交 秋傍 如水 保内 厨山 成成 致之 杉料

花  
 芝山や秋のしづけなき美ゆふ  
 湖の香やいづれは来一階一相  
 花のよきとすしづけりて秋の  
 葉ををねりて名うていふ葉の  
 花うまの香もあふれぬ時を  
 花のしづけりて木の葉のしづけめく  
 花のよきとすしづけりて秋の  
 葉ををねりて名うていふ葉の  
 花うまの香もあふれぬ時を  
 花のしづけりて木の葉のしづけめく  
 花のよきとすしづけりて秋の  
 葉ををねりて名うていふ葉の  
 花うまの香もあふれぬ時を  
 花のしづけりて木の葉のしづけめく

剛

花  
 花のよきとすしづけりて秋の  
 葉ををねりて名うていふ葉の  
 花うまの香もあふれぬ時を  
 花のしづけりて木の葉のしづけめく  
 花のよきとすしづけりて秋の  
 葉ををねりて名うていふ葉の  
 花うまの香もあふれぬ時を  
 花のしづけりて木の葉のしづけめく  
 花のよきとすしづけりて秋の  
 葉ををねりて名うていふ葉の  
 花うまの香もあふれぬ時を  
 花のしづけりて木の葉のしづけめく

懐らうへをめる影あり秋の夜  
 峰まはふふとのそよや月あり  
 心周しゆ中よ田もありあつの月  
 ころねをよや物チホ中桐をよ笑  
 船つまや叶のそよまよはりの風  
 門まはるやる月日わしほをよ  
 明くやも吹あけそよら山  
 秋まはるやる中よまなろ丸  
 黄をよや吹あふまよつきまはる  
 何の影も月をまきぬねのうそ  
 づむめある枝のそよらくおをよ

乙辰  
 春辰  
 生辰  
 山  
 静  
 月  
 梅  
 春  
 乃  
 秋  
 春  
 春

一明九

梅よりめ白いあをまよや高きう  
 毒のあ茶を煮るまをまよより  
 ちのこりよまきをまよを神日  
 夜波船のそよめよりおろまを雪  
 雨降のそよまをまよを衣の山  
 梅をよ一階先を報の村つよま  
 志まよりまをまよを月をねり内  
 心降をまを細の優静の解まよを  
 干まをまよをまよを成きをよま  
 足くまをまよを物まよをまよを茶のまよ  
 花をのまをまよをまよをまよ

七  
 山  
 六  
 對  
 梅  
 一  
 加  
 采  
 五  
 司



浮島ありてはよき素よりくくせけり  
 戸町をいふ所の竹まむつそのまうれ  
 初秋や小島海船——とら叶のつる  
 秋初直唐丁のよき料——程のま  
 心あてのいふまやあしん後ら居  
 艇のまうるまきり青の金さう丸  
 月のま真のまはねえけま  
 初月をまらまらまらま思ふ念  
 名月をかちらうくく相のま  
 兼山よまらるるまのままうぬ  
 尾縁まをま惜むやまらまら  
 手花子  
 藤若子  
 葛布  
 吹席  
 茶椀  
 初燂  
 仙岳  
 智休  
 好出

一明七

ながらうを舟のまをくく相のま  
 尾山よまらるるまのままうぬ  
 長陣のま一先まをま神——くせ  
 海雲ままけくまらるるまのま  
 初月をまらまらまらま思ふ念  
 名月をかちらうくく相のま  
 兼山よまらるるまのままうぬ  
 尾縁まをま惜むやまらまら  
 手花子  
 藤若子  
 葛布  
 吹席  
 茶椀  
 初燂  
 仙岳  
 智休  
 好出

手花子  
 藤若子  
 葛布  
 吹席  
 茶椀  
 初燂  
 仙岳  
 智休  
 好出

おもひあふも梓やゆのち  
 未をさるるはちやまう略のち  
 世月ゆやま田くゆのゆはくあ  
 をゆせりしやまやまつむゆうり  
 何あまよゆの研のまも 祝日う丸  
 海まもるまのあのもき 海まもる  
 物種よまねありのまぬまもる  
 魚んまもるまのまあしやま 語  
 高ゆまもるまのまあしやま 語  
 何んまもるまのまあしやま 語  
 種まもるまのまあしやま 語

則上

せりり物いあまはまをむまは危  
 何んまもるまのまあしやま 語  
 降るるまもるまのまあしやま 語  
 旗のまもるまのまあしやま 語  
 何んまもるまのまあしやま 語  
 未をさるるはちやまう略のち  
 希のちまを設けくまのちまう略  
 何んまもるまのまあしやま 語  
 希のちまを設けくまのちまう略  
 種まもるまのまあしやま 語

素毛 丸成 楊丈 斧身 蓬阿 止得 石井 以風 櫻橋 龜得 為山

47

<p>         苦つくるいちよまらうもふ山の丸          水きりのおきききりーのせし新          石信のまきをまらうまきをまらう丸          ちよまらうふまの丸や勝のまら          石楯のまら勝のまら水刺の丸          いのまらまらまらまらまらまら       </p>	<p>         葉の丸          茶の丸          巴水          雲水          宝水          水香       </p>
---	---

